

音痴が歌う心唄 (一)

『蜜柑の花の咲く丘』

中 林 幸 夫

(会員 香川県綾歌郡国分寺町)

昭和五十年の春、突然転勤を命ぜられた。行き先は本部から一番遠い、大分県の南端にある佐伯市である。佐伯海上保安署は巡視艇一隻の一番小さな部署で、職員は船艇乗組員を入れて全員で十名である。

署長の岩下さんは年配ではあるが、昔、本部で机を並べて仕事をした仲だから遠慮はいらぬが、そのために署長は遠慮なく仕事を言いつけるから、たまったものではない。

佐伯湾は豊後水道の入り口にあるため、太平洋を航行中の外国船や漁船の事故が起こると連絡があり、それ

対応しなければならぬので、けっこう忙しいところである。

本部から佐伯行きは明らかに左遷である。佐伯に飛ばされてくる者はたいてい上司と衝突したか、なにか問題を起こした者である。聞くところによれば船長の末永、甲板員の日高君も前任地の福岡で上司と喧嘩をしたとのことである。

保安署最古参の田辺さんが、「中さん、あんたはなにをして飛ばされたんか」と聞くが、明確に答えることができないが、新任の本山課長とはうまが合わずよく噛みついてたことと、私が離婚して独身であったことが原因ではないかと考えられる。

本部在任中は人の出来ない暗号解読で長官表彰、部長表彰をもらったし、仕事の上では思い残すことはないが、大都会の北九州市から、よりよってどん田舎へ転勤とは、精神的に寂しいものがある。

現在の日本では『村』は珍しい存在となっているが、佐伯保安署の管内には、米水津村、直川村、本匠村と三つも村が存在するのだから、田舎すぎる。

明治時代に、文豪、国木田独歩が佐伯中学の先生とし

て赴任したが、あまりの寂しさから、わずか一年で帰ってしまっている。住めば都ということわざがあるのだから、田舎には田舎の良さがあり、都会にはない楽しさがあるかもしれない。

佐伯湾は豊後水道に面し、海上もいたって平穏で海難事故が起こるような感じはしないが、田舎のうえに道路の整備が悪く、陸上から方々へ行くのには不便なところである。

着任早々、管内の地理を知るために、保安署から見える大入島にフェリーで渡ったら、食堂も喫茶店もなく、夕方出港の帰りのフェリーまで食事ができず、空腹で困ったことがあった。

また、あるとき港から連絡船で一時間のあるところにある湾口の大島へ渡ったら帰りの連絡船がなく、漁協にお願いして漁船で鶴見半島の先端にある梶寄というバス停まで送ってもらい帰ってきたことがあった。このとき一緒に行った青木君が、バス代が千円で時間が一時間かから、佐伯から大分へ行くより遠いとこぼしていた。

バスから見る半島の山々には蜜柑の白い花が満開で、

青空の下に甘酸っぱい香りが漂っていた。

この鶴見半島は九州の最東端にあり、鶴見灯台が太平洋を行き来する船に灯りをともし、航海の安全を祈っている。ここから見る豊後水道には、四国の山々と荒海の中に水の子灯台の姿も見える。昔、『喜びも悲しみも幾年月』という灯台守の物語の舞台にもなった。

近年では、鳥羽一郎が『男の港』を歌ってヒットと飛ばした。

鶴見半島から見る佐伯湾は東西約三十キロ、南北約二十キロあり、天然の良港で広い。若い人にはあまり関心はないが、この佐伯湾は太平洋戦争が始まる時、山本五十六連合艦隊司令長官がハワイ真珠湾攻撃のために訓練をして、ここから出撃して行った歴史もある。

昔の海軍の施設の後には、現在、海上自衛隊佐伯基地隊が日々、日章旗を掲げて訓練に励んでいる。歴史は切れ目なく続いている。宿直の朝、二階にある事務所の窓から穏やかな海を眺めると、エンジンを響かせて漁船が入港してくる。魚市場へ急ぐ漁船は大漁の感じである。

沖にある檢疫錨泊地で夜明けを待っていた大型の貨物

船が、ボーと汽笛を鳴らせて外国の港へ旅立つ。

どこかで見たような光景だと記憶をたどると、子どもの頃に歌ったことのある童謡『みかんの花の咲く丘』の二番の詩と同じである。

黒い煙りをはきながら

お船はどこへ行くのでしょうか

波にゆられて島のかけ

汽笛がボーと鳴りました

私は何十年も海ばかり見て生活しているから、潮風の匂いはおふくろの匂いにする。

朝の静けさの中に、電話のベルがけたたましく鳴った。

「海上自衛隊ですが、中林さんはいませんか」

「私が中林ですが」

「よかった、黒木です。実は今、潜水艦うずしおから訓練中に漂流死体を発見、収容したので佐伯に向かうと連絡があったんです」

「わかりました、ETA（入港予定）を聞いてくれませんか」

か」

「しばらくこのまま待ってください」

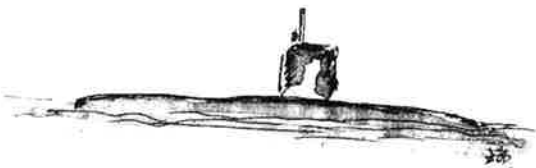
彼は潜水艦と交信しているのか、五分ほど待たされた。

「もしもし、ETA（入港予定）1430と言っておりませす」

「それでは、その時間にこちらの巡視艇さちかぜが潜水艦の錨地へ引き受けに行きます」

潜水艦の潜望鏡で死体を間近に見た人も驚いただろうが、これから死体を引き取り、検死をしなければならぬ我々も大変である。漂流死体の検死は、多いときは一日に二回の時があつたりするが、平均月に五―六回である。ここは死体の多いことと知られている。

出署時刻にはまだ時間があるが、職員心の準備があるので緊急呼び出しの電話をかける。心の準備とは



大袈裟に聞こえるが、死体によっては食欲にさしさわることもある。

その後の潜水艦からの連絡で、死体は外国人と判明した。全国の海上保安部に手配したところ、高知海上保安部から一週間前の六月二十九日に、ノールウエーの貨物船から船員一名が海中に転落している事故が発生していることがわかる。多分、この事故による船員であろう。調査の結果、船員はノールウエー船籍の貨物船オスロ号（二二五〇〇トン）のセーラーで、甲板作業中に海中転落した模様である。一週間が過ぎていると腐敗が激しく、死体の状況は想像がつく。

私も職業柄、今までに何百という死体を見てきたが、漂流死体には死体の苦しんだ形相と、腐敗によって見るからに恐ろしいものがある。昔々、イザナミの尊という神様でさえ、黄泉国で死体を見て、あんな恐ろしいものはないと言って逃げ帰ったという。

検死の準備をしているとき、ノールウエーの大使館から、死体を本国に送還してほしい。送還手続きおよび輸送については、北九州運輸株式会社を代理店にしたので

よろしくとの電話連絡があった。

午後二時半、港から沖合い三キロに潜水艦は錨を入れ停泊した。潜水艦に横付けした巡視艇から、死体を引き取ったと無線連絡があったので、死体の状況を聞くと、毛布にくるまれたままで見えないという。

我々が巡視艇専用棧橋で待っていると、巡視艇さちかぜがゆつくりと横付けした。

死体は検死用に広げられた毛布の上に、毛布にくるまったまま置かれた。検死は医師が立ち合い、検察庁の検事が実施するのが建て前であるが、検事は警察官や海上保安官に委託して代行検死を行わさせる。私は近くの病院や医院に検死医の派遣をお願いするが、医師は外科でも内科でもいいのだが、お医者さんも検死は嫌いなようで、忙しいとか、なんだかんだと言ってなかなか来てもらえない。大抵はインターンのような若い医者が、ベテランの看護婦を伴ってやってくる。

毛布を開けると、異臭が辺り一面に立ち籠める。この異臭によって、気分がまいってしまいそうになる。私は

このことを予想して線香を大量に用意しておき、周囲に線香を立てて匂いを消し、それから検死のために死体の着衣を脱がしにかかる。腐敗をしている死体から、着衣を脱がせることは大変な作業である。さわると死体の皮が剥ける。

北九州運輸からは課長の若崎氏、係長の島崎氏、係員が二名来ていたが、腐敗した死体を見た瞬間、係員の泥谷氏がガタガタと震えて棧橋の端へ逃げ込み、口も利けないでいる。初めて見る人にとつては、恐ろしいことである。死体のズボンのバンドを抜き取つたら、腹の辺りからエビと小魚が飛び出したのには驚いた。

衣服を完全に脱がせて見ると、日高君が、
「中さん、内臓がぜんぜん無いですよ」

中を覗くと内部は空洞で、あばら骨が見える。魚が食べてしまったのだろうか。肉屋に吊らされている肉の固まりである。

「先生、あの赤いのは」

私が指を指すと、覗きこんだ先生は、

「あれは肝臓ですね」

確かに、焼肉屋で食べる内臓に似ている。

「なぜ、肝臓だけが残っているの、魚が食べないのは苦味でもあるのですかね」

我々は検死調書の順番に腐敗した人間の口を開け、歯並び一本一本から細部にわたって調べて記入していく。身元不明死体の場合は、入れ歯をしていると証拠として入れ歯を抜かなければならないが、これが大変である。魚は人間の肉が好物とみえて、手や足の着衣からはみだしている部分は、ほとんどが食べられていて鳥がらのように白骨化している。

普通、検死が終わると遺族に引き渡し火葬に、不明死体の場合は役場に引き渡し火葬にするのであるが、遠い外国まで送ってくれと言われたのは初めてである。

若崎課長が、「このまま航空便で簡単に送れますかね」と聞く。私はしばらく保存しなければと思ひ、隣町にある剥製社に電話をした。

「そちらにはホルマリンありますか」

「ございますが、どれくらい？」

「どれくらいあれば足りませんか」

「何に使うのですか？」

「人間を保存したいのですが」

「なんと思つたのか」私の方には大量のホルマリンはありませんが」と電話は切れた。

検死が終わつたとき、夕日は沈みかけていた。

「先生、死亡推定時間は、六月二十九日午後六時から十二時間前後、死因は窒息による溺死、外傷等なし、でどうでしょうか」

「あなたが言われる通りでしょう」

と言いながら、看護婦に記録しておくように言つた。

「死亡検案書を帰って書きますから取りに来てください」と北九州運輸の職員に、若い医者は言つて帰つた。若い医者よりも場数を踏んでいる私の方が詳しいと思うが、医者の権威にはかなわないのである。外傷等がある場合は、事件性があるので医大の法医学教室で解剖しなければならぬが、これまたやっかいなことであるが、本日は事件性がなかつたのでこれで終了となつた。

検死に従事した我々職員には、六百円の検死手当が支給されるが、いやな役目の代償としては少なすぎる。それに比べて、腕組みをして横で眺めていただけの医師は二万五千円を請求するのである。

知らぬ間に夕日は落ちて、薄暗くなつていた。

「若崎さん、とりあえず今晚何処に置くかだね」

普通、病院は死体はすぐに引き取ってくれと言つて、霊安置所には置かせない。この異臭ぶんぶんの死体を、どこが置かせてくれるかである。こんなことに経験のない私は迷つた。

もしかと思つたが、市内にある教会、天使幼稚園に電話をして神父に直接事情を話してみたら、神父はためらひもなく、一晩お預かりいたしましたしようと、引き取ってくれることになつた。

棺桶に入れた死体を、北九州運輸のライトバンに積み込んだら、運転手の泥谷君が恐ろしくて運転できないと言つて、乗ろうとしない係長の鳥崎氏が怒つたような顔をして、「私が運転します」と、乗り込んでドアを力強く閉めた。私も車に同乗して教会に行くと、神父は「教会の祭壇に置いてください」と言いながらドアを開けて案内した。神父は柩に向かつて十字をきりながら、なやら小声でつぶやいた。神父に感謝したのは我々である。

重い肩の荷を下ろした気分を外に出ると、教会の暗りの中から蜜柑の花の甘酸っぱい香りがした。多分、教会の裏山は蜜柑畑で白い花が満開かもしれないと思つた。今朝、海を見ながら『蜜柑の花の咲く丘』の歌を思い出して歌つたことに気がついた。

今日一日は、長い長い一日だった。

死体は翌日、ビニールでぐるぐる巻にして大分空港から東京へ送られた。

外国人はなぜか死体を大切に、そのまま本国に送れと言うが、なぜなのか私には理解しがたい。きれいな顔であればいいが、悲惨な顔を家族はどんな顔をして見るのだろうか。昔から死ぬときは畳の上で死ぬと言うが、そうでない死の方に見られたものではない。

朝鮮戦争の折、米軍は何万人という戦死者を出した。戦死者は毎日毎日朝鮮から船で門司に運ばれ、小倉のキャンプでばらばらの死体が縫い合わされ、本国へ送還された。小倉の街は死体の異様な匂いが満ちあふれたという。それでも縫い合わせのできない死体が多く、米軍

は朝鮮に向かつている小倉の小高い丘に埋めた。火葬にしないしきたりが強いからか。

今、その丘には大きな十字架が立ち、メモリアルクロス公園と呼ばれ、米国からの参拝者が訪れている。

私は心の中で、蜜柑の花の咲く丘を歌った。

